



JASWHS 公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会

Japanese Association of Social Workers in Health Services

令和4年7月28日 第12巻(第1号)

発行：東京都新宿区住吉町8-20 四谷チンゴビル2F

災害支援チーム TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

巻頭言

1. 長 純一先生の訃報に接して
2. 日本医療ソーシャルワーカー協会役員の石巻市訪問記
 - ・石巻市保健福祉部と石巻市社会福祉協議会の表敬訪問を終えて
 - ・被災地石巻市 その段階的復興から世界に向けて
 - ・東日本大震災 震災伝承施設を訪問して
3. 石巻災害支援チーム 日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会参加報告
 - ・第70回日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会を終えて
 - ・第70回日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会に参加して
 - ・シンポジウムに参加して
4. 新職員 自己紹介
5. 災害支援チームからのお知らせ
6. 災害支援ニュース発行のお知らせ

編集後記

◇ 卷頭言

石巻被災者支援の今後

石巻災害支援チーム 統括責任者 笹岡 真弓

2011年4月2日から取り組んだ、宮城県石巻市における被災者支援は、2023年度で終了します。今終焉に向けて、現在支援中であり継続支援が必要な方々を、どのように引き継いでいくのか、また芽吹いた災害支援を基礎に置いた地域支援システムの構築にむけて石巻市とどのように話し合っていくのか、そのことを日々チーム内で話し合っているところです。

現在の現地責任者は福井康江氏で、今年で7年目の活動に打ち込んでいます。今まで多くの方々が、当協会の職員として石巻市に住み活動をしていただきました。

2023 年度の終わり 2024 年の 2 月か 3 月にはコロナ禍で延期となっている「フォーラム」も開催します。その時にはお世話になった方々をお迎えし、石巻市を後にしたいと思っています。皆様ご存じのように、「災害救助法」には福祉の文字は一言もなく、保健医療調整本部には福祉は入っていないのです。しかし、今年の参議院選挙にあたって「総合政策集 2022 J-ファイル」には

366 災害時における福祉専門職の積極的活用 及び支援体制の整備 近年頻繁に発生する大規模自然災害において、被災された住民の生活再建に向けた多様かつ複 合的福祉ニーズに対応するため、福祉専門職（社 会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、介護支 援専門員）を積極的に活用します。 また、平常時から福祉専門職や関係職種とのネットワーク化を図り、災害発生時に福祉専門職 を中心としたチーム（災害派遣福祉チーム）を 派遣できる体制を都道府県ごとに整備・充実さ せ、国において都道府県域を越えた大規模災害 時の支援体制を福祉専門職団体と連携して構築 します。

と明記されました。

これも全国の福祉団体が頑張っているからこそ成果ですが、この石巻支援の重要性についても、ロビー活動で伝えてきた成果も反映されているものと思います。

継続しなかったら理解できなかったことも、多くあります。支援活動をお支え下さった会員の皆様、さらには協会の理事会の皆様に感謝申し上げます。

1. 長純一先生の訃報に接して

石巻災害支援チーム 統括責任者 笹岡 眞弓

6 月 28 日に元石巻包括ケアセンター所長の長先生がご逝去されました。56 歳というあまりにも若い死に多くの人が衝撃を受けました。

当協会では、20 年ほど前の長野大会の時に基調講演をしていただきました。当時は佐久総合病院で地域医療に多大な貢献をなされていたらっしゃいました。そして 2011 年、長先生と石巻市で再会しました。以来 10 年以上、折にふれて先生のご指導を仰いできました。

2013 年くらいから、ひと月に一度程度石巻市に行くと開成診療所に伺い、現地の状況を先生からお教えいただく機会はとても貴重でした。包括ケアセンターのシステムの理念は、素晴らしいものでしたが、石巻市での定着には多くの課題がありました。私たちの活動が撤退できなかった要因のひとつでもあります。

石巻市長選の時に、中立を守らなければならない立場であったため、選挙事務所で応援できなかったことが、個人としては悔やまれる思いもあります。

長先生の地域医療構想には、ソーシャルワーカーは不可欠の存在だとおっしゃっていただきました。今は不可欠であるための渾身の努力を続けることが、先生の思いの一端にこたえることだと、自身を鼓舞しています。

長先生のご冥福をお祈り申し上げます。

2. 日本医療ソーシャルワーカー協会役員の石巻市訪問記

石巻市保健福祉部と石巻市社会福祉協議会の表敬訪問を終えて

会長 野口 百香

6 月 3 日に石巻市保健福祉部と石巻市社会福祉協議会を表敬訪問させていただきました。

相澤和宏保健福祉部長や久保智光社会福祉協議会常務理事兼事業統括監に面会することができ、長年にわたる当協会の支援活動に大変な感謝を述べられ歓迎を受けました。

震災遺構の大川小学校や門脇小学校、そして津波伝承館等を見学し復興記念植樹も体験させて頂き、当時の被害のすさまじさを知り、併せて見事なまでに整備・復興された街並みを見るにつけ、被災者、支援者双方の困難に満ちた 11 年間のあゆみに思いを馳せる時間となりました。

当協会は、発災直後の 2011 年 4 月 2 日に現地に入り、福祉避難所となった遊楽館で活動を開始し、以来 10 年以上に及ぶ支援活動を継続してきました。当時の当協会会長で、現在も災害支援チーム統括責任者として活動を牽引して下さっている笹岡眞弓氏の強力なリーダーシップと支援活動の中心を担い、被災者の方々を今も支え続けて下さっている現地職員の皆様、そしてのべ 3,000 名を超える会員の方々の協力を得て、復興に向けて歩み続けた 11 年間でした。

先日の和歌山大会では災害支援チームによる「東日本大震災における 10 年間のソーシャルワーク実践に関する縦断的調査研究報告」と題するシンポジウムが開催されました。現在、チームの活動にアドバイザーとして尽力頂いている大橋謙策先生のご指導の下、10 年間の活動報告書の作成が進められており、その一部がシンポジウムで発表されました。報告書では、現地で繰り広げられたソーシャルワーク実践を縦断的に分析し、復興の時期別に求められるソーシャルワーク実践の視点やスキル、アセスメントのポイントが示され、発災直後から復興期に至るまでの長期的な生活再建におけるソーシャルワーク実践のあり方が明らかにされる予定です。

現地への訪問で被災者の苦悩を知り、その苦悩を抱えながらも歩みを止めず、それを支え続けた多機関の多くの支援者の関わりがあって復興への道、地域共生社会の実現へ繋がる成果を生んでいることを教えられました。改めて本事業の真価を協会事業の貴重な財産として捉え直す機会となったことに感謝を述べたいと思います。



被災地石巻市 その段階的復興から世界に向けて

副会長 小原 眞知子



今回は私にとって4度目の訪問となりました。11年にわたる災害支援チームの活動の重みと意義をあらためて認識する機会となりました。2011年3月11日に起こった東日本大震災は石巻全体にも未曾有の被害をもたらし、3800人以上の方々が犠牲となりました。建物の倒壊や公共交通機関が途絶え、人々の生活もままならない状況を目の当たりにした1度目の訪問の時には、当協会が遊楽館避難所で会員ボランティアをフル稼働させ初期対応に奮闘していた時期でした。2度目の訪問の時には、仮設住宅から復興公営住宅への入居者支援を積極的に行っている時でした。その時には、利用者の家庭に同行訪問させて頂きました。復興公営住宅の転居支援の中で、1人で対応が困難な高齢者や障がいのある方に対して、利用者の目線で丁寧にそし

て共に歩む職員の真摯な姿勢に心打たれました。3度目の訪問は、2018年にアジア太平洋地域の若手のソーシャルワーカー5名を石巻に招待しワークショップを開催した時です。周知のとおり、アジア太平洋地域は、台風、洪水、地震など自然災害が多く、アジア太平洋地域のソーシャルワーカーは、災害ソーシャルワークを学ぶ必要性を認識しています。当協会の災害支援活動の現状や災害ソーシャルワークのあり方について共有して頂きました。

今回の訪問では、大震災から 11 年経ち、インフラ整備を含めて新しい病院、ビルや建物などハード面の復興の実際を見ることができました。今回は 3 度目になりますが大川小学校の跡地にもお伺いしました。伝承館の中に展示されているものを拝見し、震災被害の事実をあらためて認識する機会となり「命を守る」こと、残された私たちソーシャルワーカーが「命ある人々の生きることを支えていく」ことの重要性と決意をあらたにしました。石巻市役所や石巻市社協を訪問させて頂き、石巻が多くのボランティアの方々や支援団体を受け入れ体制作りの中で人々の生活再建を行ってきたこと、ニーズが浮き彫りになっている方々への継続的な支援の必要性など地域課題について理解できました。特に復興に向けての支援のフェーズが変化する中で、当協会の災害支援チームが地域の方々に寄り添い、11 年間にわたり専門的支援を継続してきた実績と貢献が高く評価されていることに、とても嬉しく、また誇らしく思う 4 度目の訪問でした。

この当協会の災害支援活動はミクロからメゾ・マクロに至るソーシャルワークの好事例として、ウクライナの再建に向けたソーシャルワークにも参考になると、海外からも注目されていることを皆様にお伝えしたいと思います。



東日本大震災 震災伝承施設を訪問して

事務局長 山崎 まどか



国内最大の被災市町村といわれる石巻市で、当会の活動が続けられています。はじめに、活動に携わられた皆様におかれましては、外部支援者としてのかかわりの難しさもあったと想像するなか、敬意を表します。

私自身は2012年以来の訪問で、3つの震災伝承施設についてお伝えさせていただきます。まず、多くの子どもと教職員が8.6mの津波に襲われた大川小学校です。耳を澄ませば、子どもたちの声が聞こえてくるようでした。ご遺族らによる伝承館には、「本当に恐ろしいのは、津波でなく、大事なものを真中にできないこと」、「空が世界をひとつにつなぐように、人が人をつないでくれる」とありました。次に、津波火災にみまわれた門脇小学校では、ほぼ全焼した校舎から被害の大きさが伝わってきます。裏の目白山に避難し、生き抜いてきた子どもたちの語り

3. 石巻災害支援チーム 日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会参加報告

第70回日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会を終えて

文京学院大学 平野 裕司

2022 年 6 月 25 日（土）・26 日（日）に和歌山県和歌山城ホールで開催されました、第 70 回公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会にて、「東日本大震災における 10 年間のソーシャルワーク実践に関する縦断的調査研究」と題し報告しました。

第一報告 笹岡眞弓からは本シンポジウムの企画趣旨、当協会の石巻市における支援活動の展開。第二報告 西田知佳子からは 2011 年 4 月 2 日～9 月 30 日まで福祉的避難所として開かれた遊楽館における、当協会の支援内容と入所者の属性分析の結果。第三報告 平野裕司からは被災者の属性分類及び抱えやすい生活課題に対するソーシャルワーク支援。第四報告 福井康江からは障害のある人が抱えた生活課題・展開された支援。第五報告 大橋謙策からは災害被災者支援におけるソーシャルワークの体系化の必要性・重要性について報告が行われました。

参加者からは、災害派遣福祉チームの構成員として、保健医療分野で勤務する MSW が被災地に派遣される少なく、派遣していくためには、どのようにしたらよいのかという質問いただきました。その質問も踏まえ今後は、再度当協会学会や会長会、災害支援ニュース、協会ニュース等で発信していくとともに、石巻でのソーシャルワーク実践の調査・研究結果をもとにした災害時ソーシャルワーク研修を企画していく必要性を改めて感じました。

また、被災者の属性分類に基づくソーシャルワーク支援の展開の必要性を認識したとのコメントをいただきました。



シンポジウム登壇者

上段左から：笹岡・大橋・西田

下段左から：福井・平野

第70回日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会に参加して

石巻災害支援チーム 現地責任者 福井 康江

この度の全国大会では、シンポジウム7の“東日本大震災における10年間のソーシャルワーク実践に関する縦断的調査研究報告”のシンポジストの一人として、「障害のある人が抱える生活課題・展開された支援事例」を報告した。

1、本研究における基礎データ

東日本大震災後の2011年10月から2021年3月31日までの当協会における総支援ケース数は1,047件であり、その内、障害がある人が相談者であり本研究で分析対象としたケース数は58件であった。

*分析対象としたケース（総数58）の年齢層別障害別分類表

	身体障害	知的障害	精神障害
若中年層（65歳以下）総数35ケース	7ケース	3ケース	25ケース
高齢層（65歳以上）総数23ケース	18ケース	1ケース	4ケース

2、分析方法

ケース記録からアセスメントシート作成し生活課題を明確化した後、支援開始時と支援終了時の状態を“支援を必要とする対象者の分類”の階層にあてはめ、比較検討した。

また、支援経過についてソーシャルワーク支援の要点とソーシャルワーク支援の成果をまとめた。また、住居の変遷を作成（マッピング化）した。

3、報告内容

今回のシンポジウムでは、分析対象とした58ケースのうちの2事例の報告と考察について述べた。

1つ目の「震災前からひきこもっていた人への生活再建支援～アウトリーチ型支援とラポール（信頼関係）の形成が重要であったソーシャルワーク支援～」についての事例では、ソーシャルワーク支援の成果として、まず信頼関係の構築を目標にアウトリーチ型支援を開始し、生活環境への支援や治療が継続して受けられるよう支援を行いながら、生活再建に向けて伴走的な支援をしていたことを報告した。

2 つ目の「家族と疎遠になっていた単身生活者への生活支援及びソーシャルサポートネットワーク形成の支援が不調に終わった事例」では、ソーシャルワーク支援の課題として、仮設住宅から復興住宅へ転居し環境が変わったことが精神疾患の悪化の要因の一つになっていたことを述べ、環境が変わることでの負担や影響を避ける、若しくは緩和するためには、仮設住宅入居時にかかわりがあった時点で、生活歴や治療歴、病状や障害の状況などを含めた全体的なアセスメントを行い、支援を継続しながら復興住宅への転居支援を行うことが必要であることを報告した。また、考察として、障害を抱えヴァルネラビリティの状況にある人は自ら生活課題を認識し、支援を求めることが難しいことから、本人が生活課題を認識していない、あるいは認識していても表出できない状況が長期化すると、生活課題が増え、しかも多様化・複雑化することが明らかとなったことから、発災後早期に対象者を発見し判断し、必要な支援につなげる仕組みが必要であることと、生活課題の見落としを防ぎ、ソーシャルワーカーがコーディネート機能を担い多職種連携の支援を展開する手立てとして、アセスメントシート等を用いることはその一つとなり得ると思われることなどについて述べた。

持ち時間の中では、事例については十分に伝えることはできなかったが、笹岡氏、西田氏、平野氏による報告の中で、災害後において継続的、専門的なソーシャルワーク支援が必要であることや、ソーシャルワークを可視化することの必要性については、十分に伝えていただけたと思っている。また、大橋謙策先生からは、まさに当協会の発災後から続く災害支援活動を縦断的調査研究としてまとめることの価値について、非常に心強い後押しと共に調査に関わることの責任を感じさせていただき、改めて感謝を感じている。

縦断的調査研究はまだ続いており、皆様には一日でも早く最終的な報告をしてゆきたいと思っている。

〔和歌山城 散策記〕



大会会場となった和歌山城ホール付近から見える、和歌山城



野面積の石垣

* 豊臣期のものも残っている
そうです。

和歌山城内にある伏虎像

* 和歌山城は虎伏山に建つことから、
別名虎伏城とも言われています



お堀の風景

一の橋と大手門



.....

.....

内容は震災後日本協会が石巻を支援すると決意して行政から依頼を受けて開始した、福祉的避難所、遊楽館での支援概要と避難者の具体的な話でした。6か月間、遊楽館で責任者として身を粉にしてソーシャルワークを行ったKさん、そして全国から駆け付けた200人以上のソーシャルワーカーたちのソーシャルワークの活動の報告をしました。その間東京の協会事務所で、勤務先の病院に有給届けを出しながら途切れることなく後方支援を行ってくれた多くのソーシャルワーカーの方々にも感謝です。当時の状況を振りかえり、今後の大災害の時にその時の経験が役に立つよう、この後も記録・資料の整理を続けていきます。

[1](#)
[2](#)
[3](#)
[4](#)
[5](#)
[6](#)
[7](#)
[8](#)
[9](#)
[10](#)
[11](#)
[12](#)
[13](#)
[14](#)
[15](#)
[16](#)
[17](#)
[18](#)
[19](#)
[20](#)
[21](#)
[22](#)
[23](#)
[24](#)
[25](#)
[26](#)
[27](#)
[28](#)
[29](#)
[30](#)

.....

趣味は詩作、産経新聞の朝の詩（うた）欄に40代より投稿、18回掲載されました。50倍の

確率とかでなかなか載りません。いつか一冊の詩集を上梓するのが夢です。『朝の詩』から生まれた詩人、柴田トヨさんが目標です。

花は好きでカメラでよく撮っています。葉書にして季節の挨拶を書くのが楽しみです。

久々の就労で少しは痩せるかな？と期待しています。（痩せるようにこき使ってください！）

どうぞよろしくご指導お願いいたします。

「野薔薇」

我が家の畑と

隣の畑のあぜ道に

野薔薇が咲いている

その側に

大きな石がひとつ

そこに座つて

「やすみなさい」というように

野薔薇は咲いている

誰も手入れをしたわけでもなく

みとめられもせず

ひそやかに

薔薇は咲いている

(2000 年頃 産経新聞 朝の詩掲載)



写真：十六夜薔薇(いざよいばら)

[1](#)
[2](#)
[3](#)
[4](#)
[5](#)
[6](#)
[7](#)
[8](#)
[9](#)
[10](#)
[11](#)
[12](#)
[13](#)
[14](#)
[15](#)
[16](#)
[17](#)
[18](#)
[19](#)
[20](#)
[21](#)
[22](#)
[23](#)
[24](#)
[25](#)
[26](#)
[27](#)
[28](#)
[29](#)
[30](#)

5. 災害支援チームからのお知らせ

【1. 書籍販売】

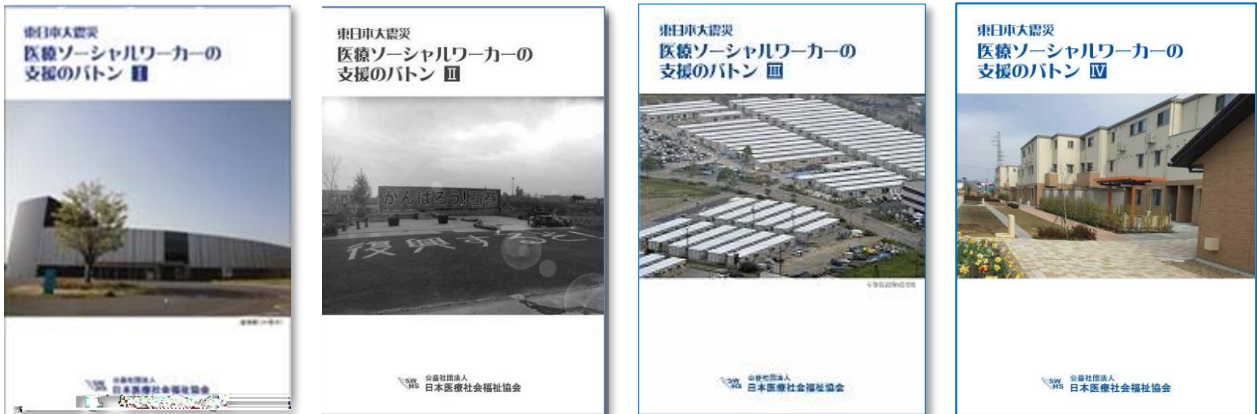
『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ』

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ』

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ』

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のボタンⅣ』

の販売を行っています！



発災から 2011 年 9 月 30 日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011 年 10 月から 2012 年 12 月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地 SW との協働の記録を『バトンⅡ』に、2013 年 1 月から 2014 年 3 月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地 SW との協働の記録を『バトンⅢ』にまとめました。そして 2017 年 5 月、2014 年 4 月から 2016 年 3 月までの災害支援チーム、石巻市での復興公営住宅への入居支援・仮設住宅被災者自立生活支援・グループワーク支援・市民活動支援の記録を『バトンⅣ』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせていただきます。

※ご注文は注文用紙で承ります。(注文用紙はホームページからダウンロードできます)

お知らせ欄から注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/about/publish_index.php

注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/news/news_detail.php?@DB_ID@=1393

【2. facebook】



現在不具合のため、
当 facebook への情報掲載は休止中です。

6. 災害支援ニュース発行のお知らせ

次回発行予定

令和 4 年 10 月予定

◇ 編集後記

事務担当 金子 小夜子

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災発災から数えて 12 年、2022 年度も当協会は石巻での支援活動を行っております。先日、3 月 15 日付の新聞で「震災こころのケア・ネットワークみやぎ」の代表理事で精神科医の原敬造さんへのインタビュー記事を読みました。当協会石巻事務所とも協力的な関係にある「からころステーション」を支援拠点として今も石巻、東松島市、女川町の方の相談支援をされていて、月に約 1000 件の相談があり、その 6 割が不安や恐怖の感情を抱えているそうです。当協会の支援内容も同じ傾向がみられるのではないのでしょうか？

また、6 月上旬には当協会 会長、副会長、事務局長 が石巻市に出向き、石巻市保健福祉部と石巻市社会福祉協議会を表敬訪問され、「震災遺構門脇小学校」も訪問されました。

7 月 2 日の新聞記事で、この 4 月「震災遺構門脇小学校」の館長に就いたのはリチャード・ハルバーシュタットさんというイギリス出身の方を紹介していました。2011 年震災発生後に大使館からの帰国してほしいとの連絡をうけ仙台に出たけれど、石巻に戻り今日に至ったそうです。

多くの人々がそれぞれの立場でこの東日本大震災発災からの復興に関わって来られたことを痛感した次第です。

新型コロナウイルス 終息を期待して

最大限の予防はマスク・消毒・手洗いの継続です。